

氏名	長 川 富 保
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1245 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和56年12月31日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学 位 論 文 題 目	加齢に伴う卵巣機能の変化 incubation 実験による aromatase および 17β -hydroxysteroid dehydrogenase 活性の検討
論 文 審 査 委 員	教授 産賀敏彦 教授 佐伯清美 教授 大森弘之

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

^{14}C -androstenedione (27例), ^{14}C -estrone (19例)を基質として摘出ヒト卵巣の incubation 実験を行ない, 症例を年令別に四群に分けて検討した。

Aから E_1 への転換量は更年期前期を100%として比較すると, 中期30.5%, 後期8.4%, 老年期0.6%であり, Aから E_2 への転換量はそれぞれ50%, 9.0%, 0.8%であった。AからTへの転換量は各年令群を通じて著しい差はみられなかった。 E_1 から E_2 への転換量はそれぞれ62%, 33%, 8%であった。以上のことにより次の結論を得た。①aromatase活性は加齢に伴い加速度的(指数関数的)に低下し, 特に閉経期に一致して急激に低下した。② $17\beta\text{HSD}$ 活性は加齢に伴い直線的に低下した。 $17\beta\text{HSD}$ 活性の減少はaromataseの失活と比較すると軽度であり, 量的にも時間的にも明らかな差を認めた。③ $17\beta\text{HSD}$ 活性は老年期に入っても明らかに存在し, またAと E_1 を基質とした場合で加齢に伴う変化が異なり, Aを基質とした場合の方がより軽度の低下にとどまった。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は更年期における卵巣機能の変化を研究したものであるが, 人臍出卵巣における性ホルモン合成能の年令的变化を系統的にしらべることによって重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって, 本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。